

特集「ジェンダーと色彩」 Special Issue: Gender and Color

肌の色とジェンダー

Skin tone in terms of gender

山田 雅子

Masako Yamada

埼玉女子短期大学

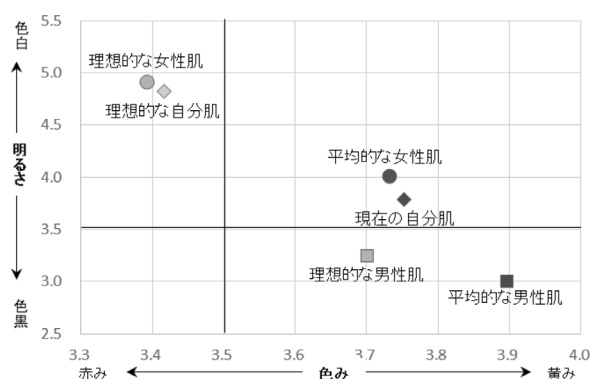
Saitama Women's Junior College

キーワード：肌の色、ジェンダー、性差、化粧、ステレオタイプ

Keywords: skin tone, gender, sex differences, make-up, stereotype

1. 「美白」は誰のものか

「美白」という言葉がある。現在では、当該語や価値観を過去のものとすべきとの潮流もある^{1,2,3)}。その只中にあっては、「美しい白色」こそ「美白」だと考える向きもありそうだが、美しい色白の“肌”を指す言葉として、かつて確固たる認知度を誇ったのが「美白」という語である。では、この「美白」とは誰に向けられた言葉なのであろうか。



山田雅子. (2017). 言語表現に見る日本人若年女性の肌色観. 日本色彩学会誌, vol.41, no.2, pp.55-61. Figure1より引用

図1. 平均値に基づく各肌の色の布置

図1は、女子学生が抱く各肌の色のイメージを明るさと色みの二次元で示した散布図である⁴⁾。女性に関する○のマーカーはグラフ上部の第1・2象限に、男性に関する□のマーカーは右下部の第4象限に配されていることが特徴的であるが、大まかに表現するとすれば、「女性は色白、男性は色黒」という方向性を示しているといえる。さらに、左上に集まっているのは理想的な女性の肌や回答者本人(女性)の理想を示すマーカーである。第1象限の下方に認められる◆のマーカーが女子学生たちの「現在地」の評価であるから、実際の自身の肌の色よりも数段階明るい肌を目指していることが読み取れる。つまり、少なくとも若年の日本女性たちの多くにとって、「美白」は「自分事」となっ

ているのである。

当該結果は女子学生のみ个回答に基づくものであるが、男子学生を含んだ調査においても類似の傾向が示されている。具体的には、「好ましい男性の肌色<自身の肌色・理想の肌色<好ましい女性の肌色」のように肌の色の明るさの段階が選択されたことが統計的に明らかとなり、女性と色白肌とを結びつける傾向が男子学生にも認められた⁵⁾。つまり、女性自身が色白肌を女性の理想として捉えるのみならず、男性も同様に、色白肌と女性を親和性の高いものとして受け止めていることになる。「美白」は専ら女性に向けられたものだというのが、ここまでの日本人の価値観であるといえよう。このように、男女間で異なるステレオタイプ、いわば男女非対称のステレオタイプが厳然と存在するのが日本における肌の色なのである。

2. 肌の色の「性差」と「ジェンダー差」

人の肌は実に多様である。透き通るような色白肌の男性もいれば、小麦色の肌を持つ女性もいる。前述のような肌の色のイメージは飽くまで頭の中での想像であり、現実の男女の肌は、そこまで違わないのではないか。そのように疑ってみることもできよう。

実際に日本人若年男女各16名の頬や額の肌を視感測色した調査結果からは、全体として、「男性の方が女性に比して赤み寄りで明度が低く、色みの濃い」色であったことが確認されている⁶⁾。他の計測結果においても、男性の肌の方が女性よりも低明度であったことが示されている^{7,8)}。

だが、ここで示された男女の肌の色の差は「性差 (sex differences)」なのであろうか。性差とは、性に由来する生物学的な差異のことである。肌の色は、日々の行動の結果としての日焼けや、その日焼けを防ぐ行為、さらにはメイクアップ化粧など、その人自身が選り取る行動によって大きく変化することを忘れてはならない。さらに、その行動には男女別に規定された社

会的価値観が多分に関与する。たとえ化粧を施していない肌を男女別に測色したとしても、生来の遺伝的要素のみを取り出すことにはならない。日々選び取られる行動が反映される限り、そして、その行動に男女別の行動規範が絡み付いている限り、肌の色の男女差は厳密には「性差」とは言い得ない。現在のところ、肌の色から社会の影響を取り除くことは限りなく不可能に近い。そうであるならば、肌の色の男女差は、むしろ専ら社会の関与を前提とした「ジェンダー差 (gender differences)」として扱う方が適切とも考えられる。

3. 肌の色と顔の形態

視点を変え、ここからは我々の性別認知に対する肌の色の影響について考えてみたい。

人と相対する場面では、意識もなしに自動的に相手の性別を判断しようとしている。例えば、図2のような顔を前にした場合はどうであろう。性別を捉えようとする心の動きが実感されるのではなかろうか。



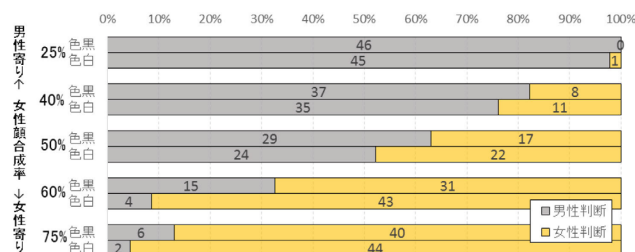
山田雅子, 齋藤美穂. (2007). 顔の性別認知における肌色と形態の作用. 日本色彩学会誌, vol. 31, no. 3, pp. 183-194. Figure2より一部引用

図2. 男女の合成顔刺激の例

日本人の顔においては、鼻や輪郭に男女間の違いがあることが指摘されている⁹⁾。そうした形態的な情報からのみ性別判断がなされるかといえそうではない。実験により、ここにも肌の色に関わることが明らかとなっている。男女それぞれの平均顔を合成した様々な顔刺激(図2参照)に対して性別判断を求めたところ、男女の顔の合成率が拮抗する場合に肌の色の明さが強く作用することが判明したのである¹⁰⁾。図3-1および図3-2は、各顔刺激に対する性別判断結果を示したグラフである。女性顔合成率50%や60%の顔パターンでは、肌の色が色白であれば女性、色黒であれば男性と判断される確率が大きく上昇することが当該図から読み取れる。すなわち、第1項で示した男女の肌の色のイメージが、日々の顔の性別判断時にも参照されているということになる。

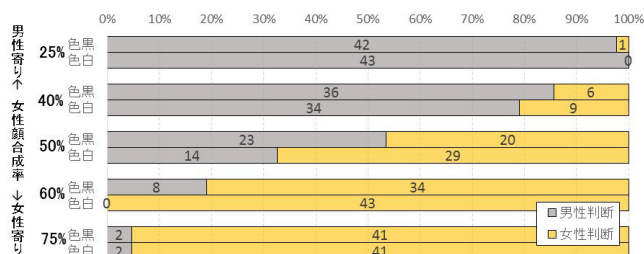
また、肌の色による当該影響は、顔の形態情報からの性別判断を阻む条件が加わるほど明瞭となる。上下逆様の倒立呈示や1秒にも満たない瞬間呈示の場合に

は、肌の色のジェンダーステレオタイプに頼った判断がより顕著になることが示されている¹¹⁾。潜在・顕在の個人差こそあれ、肌の色がジェンダーとの結びつきによって整理され、新たな入力情報に対する分析にも参照されていることが窺われる。



山田雅子, 齋藤美穂. (2007). 顔の性別認知における肌色と形態の作用. 日本色彩学会誌, vol.31, no.3, pp.183-194. Figure3-1より著者改変

図3-1. 各顔刺激に対する性別判断結果 (男性対象者)



山田雅子, 齋藤美穂. (2007). 顔の性別認知における肌色と形態の作用. 日本色彩学会誌, vol.31, no.3, pp.183-194. Figure3-2より著者改変

図3-2. 各顔刺激に対する性別判断結果 (女性対象者)

さらに興味深いことは、肌の色に関わらない性差観とこうした肌の色に基づく性別判断が結びついていることである。伝統的性差観を持つ対象者は、色白の顔に対して女性、色黒の顔に対して男性と判断する確率がより高くなる傾向も示されている¹²⁾。また、第1項に示した男女の肌のイメージにおいても性差観は影響を及ぼす。伝統的性差観が強い場合には、「好ましい男性の肌の色」が「やや色黒・色黒」に近づくのに対し、弱い場合には「普通」に近づく傾向にあったと報告されている¹²⁾。また別の研究では、伝統的性差観を持つ男女は、自身の理想の肌の色と同性の好ましい肌の色をステレオタイプ方向に寄せる傾向、すなわち、女性に対しては色白、男性に対しては色黒に引き寄せて回答する傾向が捉えられている⁵⁾。

さて、ここで図2の種明かしをしたい。左から、女性顔の合成比率が50%の色黒顔、同色白顔、60%の色黒顔、同色白顔、75%の色黒顔の5種である。実際の生活場面では、化粧や髪型、服装などの情報が加わることになるが、顔だけの限定的情報からどのように判断するか、それぞれに試してみていただきたい。

4. Z世代に見る変化の兆し

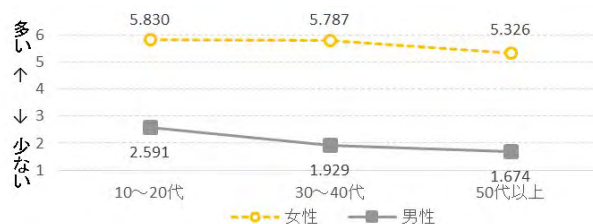
第2項において示したように、男女の肌の色の違いを生み出しているものの一つに化粧がある。この化粧行為との親和性が男女非対称であるが故に、ここまで述べてきたような男女の肌の色の違い、ジェンダー差が生じている面があることも否定できない。

だが、この「男女非対称」の状況が変わりつつあることを感じている方も少なくないであろう。図4-1は、1990年代中盤以降に生まれた、いわゆるZ世代の女子学生が捉えた男女のメイクアップ化粧の実態、図4-2は、メイクアップ化粧を男女に推奨する度合いを年代別に表したグラフである¹³⁾。いずれの図においても男女間の差は依然大きく開いているが、男性によるメイクアップ化粧の実態(図4-1)も、男性に対するメイクアップ化粧推奨の姿勢(図4-2)も、決して皆無ではないことが読み取れる。特に、対象者と同年代の10～20代の若年男性については、他の年代よりもメイクアップ化粧との親和性が感じ取られている様子である。この背景として、韓国発のK-POPアイドルの影響を無視するわけにはいかない。2023年現在でも若年層を中心に絶大な人気を誇っているが、K-POPの世界では男性のメイクアップ化粧も当たり前のことであり、ステージ上からの延長によって、一般男性の化粧に対する見方まで変わってきていることは想像に難くない。日本の男性にも確かに変化は生じている模様で、当然のようにメイクに親しむ原宿の若い男性たちの姿が報じられてもいる¹⁴⁾。

男性用化粧品のマーケットもここ数年で急激に拡大している¹⁵⁾。ただし、大きく拡大しているのは基礎化粧品の分野で、メイクアップ化粧品は小幅な拡大に留まるという。新型コロナウイルス感染症の蔓延による2020年以降の特殊な生活により、オンラインミーティングツールが急激に普及し、自分自身の顔を、さらに言えば、自分自身の肌を直視する場面は男女問わず確実に増えた。結果として、男性にも化粧という手段が自己演出の選択肢に加えられ易くなったと考えられる。だが、2022年の調査¹⁶⁾で「男性がやっていると特別だと思う」という美容行動としてメイクがネイルに次いで挙げられていることから、男性のメイクアップ化粧が全世代に受け入れられるには至っていないことが窺われる。

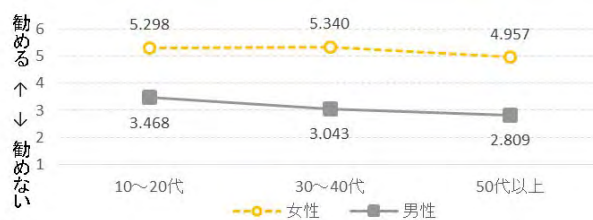
図5は横軸に実態評価、縦軸に推奨姿勢を配した散布図である¹³⁾。全体として右上がりの回帰直線が描かれているが、メイクアップ化粧においてその傾向が一段と強い。当該特徴は、実態の評価が明瞭であるほど

推奨する姿勢も強いという連関を示すものであり、メイクアップ化粧が行われている実態が強く感じられる状況では推奨姿勢も強まる、逆に言えば、推奨姿勢が強く持たれば、化粧が行われているという実感も一層明瞭になるということになる。先の調査結果¹⁶⁾のような「特別だと思う」という反応が弱まり、メイクアップ化粧を勧める姿勢がより積極的に伝えられるようになれば、男性メイクの実態も徐々に変化していくのかもしれない。



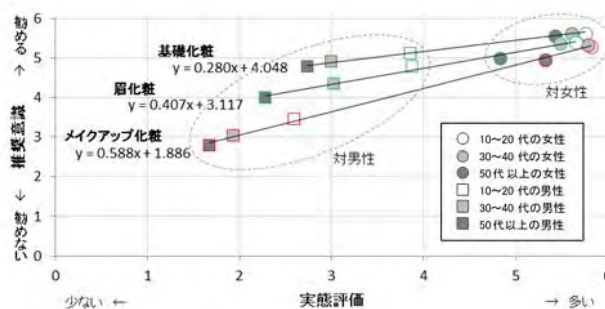
山田雅子。(2021). 男女の化粧行動に対する日本人女子学生の意識. 埼玉女子短期大学研究紀要, vol. 44, pp. 11-26. Figure 5-2より著者改変

図4-1. メイクアップ化粧に対する実態評価



山田雅子。(2021). 男女の化粧行動に対する日本人女子学生の意識. 埼玉女子短期大学研究紀要, vol. 44, pp. 11-26. Figure 5-2より著者改変

図4-2. メイクアップ化粧に対する推奨姿勢



山田雅子。(2021). 男女の化粧行動に対する日本人女子学生の意識. 埼玉女子短期大学研究紀要, vol. 44, pp. 11-26. Figure 7より著者改変

図5. 実態評価と推奨姿勢による各化粧の布置

5. 残る問題

肌の色を扱うことの難しさは、半透明であることや、色むらがあることなどによる測色時の不安定さにもあるが¹⁷⁾、より慎重に意識を向けるべきは、多分に社会的意味に関わるという点であろう。個人のアイデンティティそのものとして捉えるべき側面があることを忘れてはならない。一研究者としては、心理現象を

明らかにすることや心理の面から現代の社会が抱える価値観を記述する責任がある。だが、調査するにせよ、研究成果を公表するにせよ、配慮を欠いてはならないのである。ここで、学生からのコメントを紹介したい。某大学にて、筆者自身が本特集記事のような肌に関する話題を提供した折に寄せられたものである。

私は2年前に日本に帰ってきたばかりで、今まで海外での生活が長かったのですが、今日の講義を色々な人種の人たちの前ですると、人種差別になるだろうなと思いました。先生にももちろんそんなつもりがないことは十分分かりますが、聞いていて少し気分が悪くなる場面がありました。しかし内容自体はとても興味深いもので、楽しかったです。事前(授業が始まる前など)に、内容について少し告知をしてほしかったです。途中、退出しようかと思ったほど、気分を害した時もありました。

[2015年度 筆者授業に対する受講者のコメント]

目の覚める思いであった。この学生が理解しようとしてくれたように、筆者自身には差別の意識など微塵もなかった。予期することもなしに、深くこの受講者を傷つけてしまったことを思い知った。他の受講者からは、興味深かった、勉強になった等の感想が多数寄せられたが、多くが満足すればよいわけではないのである。主観を極力排除し、研究結果を事実として伝えることは当然のことながら、殊肌の色に関する内容は、人種、ジェンダー等、受け止める側の尊厳を慮り、常に想像力を最大限に働かせる必要がある。

本稿では、ジェンダーの視点から肌の色を捉え直した。「多様性への配慮」とは、昨今しばしば叫ばれる言葉である。ここで取り上げた内容はいまだ「多様性」に乏しいが、ジェンダーもまた多様であって良いはずである。肌の色を巡るジェンダー観が今後どのように変化していくのか、研究に携わる者としても、一生活者としても、真摯に注視していきたい。

引用文献

- 1) 大野友嘉子. (2020). 欧米で見直し相次ぐ「美白」日本でも多様化する美容を巡る美意識. 朝日新聞 2020年12月18日.
<https://mainichi.jp/articles/20201207/k00/00m/040/122000c>
- 2) 齊藤薫. (2020). 「美白」は本当に差別にあたるのか? . Yahoo! ニュース 2020年7月1日
<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/9b26abc14bc74f4b1e24814eca0fb1f902f83910>
- 3) 日本経済新聞. (2021). 花王、「美白」表現を撤廃 人種の多様性議論に配慮 化粧品で. 日本経済新聞 2021年3月27日朝刊
<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO70408840W1A320C2TJC000/>
- 4) 山田雅子. (2017). 言語表現に見る日本人若年女性の肌色観. 日本色彩学会誌, vol. 41, no. 2, pp. 55-61.
- 5) 赤澤淳子. (2004). 男女大学生における肌色評価, 性差観, および化粧行動の関連. 福山大学研究紀要, vol. 18, pp. 53-66.
- 6) 山田雅子. (2008). 膚色における性差. 埼玉女子短期大学研究紀要, vol. 19, pp.249-261.
- 7) 吉川拓伸. (2005). 肌色を科学する—第2回—. 日本色彩学会誌, vol. 29, no. 2, pp.125-129.
- 8) 道江砂江子, 中村美和, 山崎和男, 飯塚幸子. (2000). 日本人男女における加齢に伴う皮膚色の変化. 実践女子大学生活科学部紀要, vol. 37, pp. 101-105.
- 9) Yamaguchi, M., Hirukawa T., & Kanazawa, S. (1995). Judgement of gender through facial parts, Perception, vol. 24, pp.563-575.
- 10) 山田雅子, 齋藤美穂. (2007). 顔の性別認知における肌色と形態の作用. 日本色彩学会誌, vol. 31, no. 3, pp.183-194.
- 11) 山田雅子, 齋藤美穂. (2005). 性別判断方略における観察時間と提示方向の影響. 日本心理学会第69回大会発表論文集, p.637.
- 12) 山田雅子. (2011). 肌色に基づく顔の性別認知と性差観. 日本色彩学会誌, vol. 35, no. 2, pp.101-112.
- 13) 山田雅子. (2021). 男女の化粧行動に対する日本人女子学生の意識. 埼玉女子短期大学研究紀要, vol. 44, pp.11-26.
- 14) NHK オンライン News Up. (2022). “メンズメイク” 1000年前から当たり前?
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220829/k10013788211000.html>
- 15) インテージ. (2021). コロナ禍でも伸びた! 男性の化粧品購入.
https://www.intage.co.jp/news_events/news/2021/20210422.html
- 16) クロスマーケティング. (2022). 男性美容に関する調査.
<https://www.cross-m.co.jp/report/life/20220414mensbeauty>
- 17) 吉川拓伸. (2005). 肌色を科学する—第1回—. 日本色彩学会誌, vol. 29, no. 1, pp.31-34.